

\* 「銃」(女性版の、小説未満の草案)の冒頭

\* 「銃2020」(映画)の中村案段階の脚本

\* 「銃2020」(映画)の中村案段階の脚本、の註釈

中村文則

【まず最初のこれは、映画とは関係なく、「銃」の女性版の小説を、もし書くとしたら、という感じで、冒頭だけ試し書きしたものです。脚本を書くにあたり、雰囲気をつかむためです。これはまだ小説の前段階の草案です。ここから本来なら、表現を直したり削ったり足したりして、小説にしていけます。冒頭付近は、小説「銃」（男性版）と対応していません。】

銃（女性版 小説未満 草案）

昨日、わたしは拳銃を拾った。もしかしたら拾ってあげたのかもしれないけど、わたしにはよくわからない。こんなに綺麗で、不機嫌そうなものを、わたしは他に知らない。これまで拳銃なんて興味もなかったけど、あの時わたしは、これを拾うことしか考えることができなかった。

昨日は雨が降っていた。店の中で窓を見た時に気づいた。窓は知らない指紋で白く汚れていて、見たくなかったのに見ていた。三人の知り合いの女の中にわたしがいて、目の前に三人の男が座っていた。お酒を飲みながら、彼らに「笑わないね」と言われて、トイレに行った時、女からも「笑わないね」と言われた。でも彼らの話は面白いと思ったし、話も上手いと思ったし、服装もきちんとしていた。一人は指が綺麗だった。

どうして、笑わなかったんだろう。笑ってもいい話は、いくつもあつたような気がする。笑うべきだったと今では思うけど、でもあの時わたしは頭が少し痛かったし、いま戻ったとしても、わたしは多分笑わないだろう。連絡先を交換しよう、と指の綺麗だった男に言われたけど、彼からラインやメールが来ても、自分は返さないだろうと思った。彼は冷たいと言つて笑った。その笑顔は幼くて、可愛い感じもした。だけど、別に連絡を取りたいと思わなかった。嫌いなもの、とも聞かれたけど、好きか嫌いかわからない。

タクシーを拾ったけど、頭が痛くて、車に酔う感じがあつた。吐いたらどうなるだろう、と考えていた。してはいけないことを、してみたらどうなるだろうと考えていた。運転手は嫌な感じの男で、リスに似ていた。この綺麗な白いシートが、ピザやクラムチャウダーやレモンサワーで汚れるところを想像した。わたしが食べたものはすべて安いもので、わたしにはいらぬもので、このシートも代わりがあるものだった。でもやめて、もう降りようと思つた。吐いたら面倒なことを言われるし、わたしも汚れるし、自分が吐いたものを見るのは嫌だった。

降りしてと言うと、運転手は驚いた表情を向けた。なぜかと聞かれたけど、答えたくなかつた。なぜ質問なんてするんだろう。首の後ろに紫の出来物ができていることを、この運転手は知らないのだろうとなぜか思つた。また頭が痛くなって、本当に吐きたいと思つた。まだ雨が降っている。傘を持っていない。水滴が首や額に当たる。でももうタクシーを拾うことはできない。

【次は脚本です。この脚本は、『銃2020』の最終的な脚本ではなく、僕（中村）が制作サイドに渡した初階段でのものです。その後、監督達と意見を交換しながら、脚本は変わっていきます（撮影時にも複数変更）。ですので本編の映画とは少し違うのですが、映画が作られるもというか、その生々しい感じを味わってもらえるかなと思います。なお、この段階の脚本の公開を目的としていなかったのも、より伝えるためにやや露骨な表現を使用している箇所などがありましたので、公開を期に若干の修正をしています。「銃」（2019）とあるのは、当初公開が2019年を予定していたからです。後にやり取りした内容も、所々加筆しています。】

映画「銃」（2019） 初校の前段階

東子（トウコ）

母（瑞穂）

刑事（二ノ宮）

男A（和成）

男B（富田）

アパートの所有者（本庄）

隣の部屋の女（日々子）

隣の部屋の女の息子（子供）（セイヤ）

死んだ女（ヨシノ）

（誰にも知られない裏テーマで、死んだ女と子供以外、全て名前を日本イメージ）

刑事A

刑事B

刑事（二ノ宮）の女

群衆に立つ子供

刑務官（女）

東子（子供時代）

変質者

\*まだシーンも増やし、肉付けも必要です。

\*今回はモノログはなし。

# 1

夜、繁華街からやや離れた道を歩く女（東子）。  
つけてくる男Bに気づく。舌打ちをする。頭痛。不機嫌。  
薄暗い方へ行くのをやめ、別の道に行こうとし、でもそれも薄暗くてやめる。  
別の道に行き、明かりのある雑居ビルを見つける。  
まるで誘うように入口のドアが開いている。中に入る。つけてくる男Bは諦める。  
汚い階段を上がる。高級ではないバーと得体の知れない店がまだ営業している。  
階ごとの汚い共有トイレを見つける。ドアを開けると、激しい水の音。  
見ると洗面台の水が出続けている。血の筋も。洗面台の傍らに銃。  
しばらく見つめ、拾う。

トイレから出る。隣の店のドアに向かう男Aの背中を見て、静かに身を隠す。

男Aが中に入り、ドアが閉まる。ドアの下にはずっと血の痕がある。でも女は驚かない。

# 2

女（東子）は自分の部屋に戻る。少し広めの古いワンルーム。放置されたガラクタに囲まれている。物凄い量のガラクタ。鳥カゴが一つ。鳥は一羽。物で、特に窓は完全に埋められている。

不機嫌のまま、銃を出す。テーブルに置いて、しばらく見つめる。

汚い日記を出す。他の日付には何も書かれてない。今日のとこに書く。

“拳銃を拾う”

しばらく考える表情。

“なんで拾ったのかは”しばらく書く手が止まる。

“これが不機嫌そうだったから”

銃をさわるが、それはどこか性的な指の動きに見える。

弾の数を確認。ここで初めて声を出す。

東子「四つ」

タイトル『銃』

# 3

女（東子）が外に出る。コンビニでパンを買う。途中、道に花柄のヘアピンとプラスチックの黒いボタンが落ちている。ヘアピンはそのまま、ボタンだけ拾う。

誰かにつけられてるように思い、振り返る。焦ってはいない。何気なく何度か振り返る。

# 4

部屋に戻り、ボタンは無造作にその辺に置き、銃を眺める。  
銃を磨く。性的な指の動きに見える。やや恍惚とした表情。チャイムが鳴る。

# 5

アパートの所有者が来る。ドアは少ししか開けず、酷い室内は見せない。

アパートの所有者「……家賃滞納」

東子「……」

アパートの所有者「その気、なったか？ ん？ その身体で」

中に入ろうとし、でも主人公に不機嫌に押し返されると、あっさりやめる。

アパートの所有者「もう少しだな」

東子「……？」

アパートの所有者「嫌なら夜逃げしろ。あと一カ月。決めとけよ」

男は次に、フラフラ隣の部屋に行く。女は部屋に戻る。

隣から声が聞こえて来る。

アパートの所有者「家賃滞納」

隣の女「あと少し」

アパートの所有者「無理だよ。……大変だよ。旦那もいねえし。こんなガキまで  
少し沈黙。」

隣の女「やめてください」

それから女の泣き声。押し倒されて諦めたような泣き声。

次第に喘ぎ声。隣の女の性格を思わせる、情けないほどの喘ぎ声。

東子（独り言）「一カ月……」

# 6

街でどうでもいい、でも少し金を持ってそうな中年の男に声をかける。

声をかける前に一瞬躊躇するが、バッグの中の拳銃を撫でる。

東子「……五万」

男「……？」

東子「三万、…三万五千」

男、女を眺める。ホテルに向かう。ホテルの入口の前。

東子「まずお金」

男「え？ 入ってからですよ」

東子「大丈夫。……保証だから」

男が仕方なく周囲を気にしながら渡すと、女はすぐそのまま、走ることもなく、普通に歩いて去っていく。驚いた男は女を追いかけるが、無視する。女は舌打ちする。やがて人が多くなるところに出て、皆が見始め、男は諦める。女はバッグ越しに銃にふれる。

#7

母親との面会。母親は時々精神科に短期入院する。

病室。お互い椅子に座っている。母親は、性的に魅力がある。

母「純也が夢に出たの」（母親は、ずっと力ない微笑みを浮かべている）

東子「……」

母「また出てきてくれたの。……どうして僕は死んじゃったのって、お姉ちゃんは生きてるのに、なんで僕だけ病気になったのって」

東子「……」

母「なんで親不孝のお姉ちゃんが生きてるのに、僕はって。……可哀想に」

母「……早く結婚しなさい。あなたなんて、価値もないんだから。ね？」

母「それで、男の子を生みなさい。あなたはそうしないとイケない。お母さんの子を生みなさい。ね？」

母が不意に後頭部を激しく搔く。（この辺りから、母親は無表情になる）

母「そんなんだから、男に嫌われるの。ね？ 尽くしなさい。男の人の言うことを、しっかりと聞きなさい」

母が立ち上がる。娘は無反応。

母が不意に、無抵抗の娘のシャツに手をかけ、ボタンを二つ飛ばすくらいに破る。

母「そう、そういう感じがいい。……いやらしい。お前はそれだけだ。そのいやらしい感じ

で、早く誰かを」

# 8

病院で支払をする。

受付の女性が、破れた東子のシャツを見る。でも同情というより、その性的な感じに嫌悪しているように見える。

帰り道、銃をバッグ越しにさわる。東子が銃を持ってきていたことがわかる。

東子（銃に）「あんな汚いの、撃ちたくないよね」

微笑む。銃に母性。現実逃避的な。

東子（銃に）「……何がいい？ これまで、誰といたの？」

# 9

銃を拾った雑居ビルに行く。ドアから血が流れていた店は普通に営業している。バーだった。女はドアを開けて入り、注文する。

「……だから、誰か持ってたんですよ」

そう、突然会話が聞こえる。

男A「……大丈夫だよ。別に誰が持ってたっても」

男「いや、そういうわけにも」

男A「あー、終わったから。まあ、気の毒だったよ？ あの女は。でも……」

会話の声小さくなっていく。東子は聞こうとするが、聞き取れない。

その会話の男Aは、あの時ドアに入っていた男Aに似ている。

男Aは店を出る。後をつけるが、見失う。

# 10

女はやや恍惚に銃を磨く。やや忘我。

銃を胸の辺りに持っていく（キヤミソール姿とか、そんな感じ。性的な格好良さは必要だけれど、全編、裸になる必要なし）。

ベッドに行く。銃に唇をつけ、ほんの少し舐める。

銃の握るところの側面を、指で撫でる。

少し迷い、でもそのまま銃を布団の中に入れる。

(布団の中で、銃の握るところの縁で優しく下着越しに撫でて自慰行為をするのだが、それはそうするのか、くらしいの思わせぶりだけでいい)。

# 1 1

街であの男Aを再び見かけ、後をつける。

でも見失う。

舌打ちをした時、その男Aが真後ろにいる。

(短い、記憶のフラッシュバック)

鳥カゴ。少女。潰そうとする母親。背を向けて、煙草と小銭入れを持ち出ていく父。

男A「……なんだお前」

男A「そうか、……お前か」

そのまま、ビルの陰に女を引きずり込む。そして後ろから身体をさわる。

男A「銃、持ってたのか、どこに持ってる。どこだ」

(男はエロいというより、無表情。女の嫌がる(性的な)ことを、性の気分ではなく、女が嫌がるからしているというか、冷静にそういうことをして、何かの目的を達するみたいな感じの男——でも途中で変わる。主人公によって)

女が男Aを振り解く。初めて男Aは女の顔をまともに見る。

男A「あー」

男A「お前、やべーな」

男Aが女を見続ける。男Aは女にやや惹かれた様子。期待に応える様子。

男A「あの銃持ってたのはどっかのヤクザの女で、もう死んだよ。ヨシノって女だ。なんか復讐しようとしてたらしいけど」

男A「警察にも知られてた女だな。……持ってた銃はOOで、日本にほとんど出回ってない。

(女性用に改造もされている) 弾も特殊。あと四つくらい入ってたんじゃないか」

男A「だから次、あの銃で誰か撃たれたら、……その死んだヨシノって女がやったことになる。つまり」

男A「お前ラッキーだな。誰か四人殺せる」

東子「その死んだヨシノって女、……誰を？」

男A「ん？」



# 1 2

男Aのバーの事務所に行く。

男A「何だお前、……俺も詳しく知らねえけど」

写真を見せられる。五十代くらいの男と、二十代くらいの女が写ってる。

男A「ヨシノって女は、こいつら殺そうとしてたみたいだな、……何か、この男の方は  
今、まだ小さいガキをどっかの施設に預けてるらしい」

男Aはもう主人公にやや性的な目。

主人公は冷静に写真を見続けている。

男Aはその様子にやや不審がる。

男A「……何だお前」

男A「人のもんだぞ、これ」

# 1 3

深夜。隣の部屋に、アパートの所有者が来ている。

喘ぎ声。でも次第に泣き声。

暴れる音。うめき声。静かになる。

東子は銃を磨いていたが、気になって玄関のドアをそっと開ける。

男の死体を引きずる、隣の部屋の女と子供（息子）。

二人と目が合う。時間は深夜。

# 1 4

三人で土を掘っている。アパートのすぐ裏の土手。埋めるのを手伝っている。

時々、東子は上着のポケットの銃を意識する。

アパートの所有者の死体に土をかける前に、しばらく迷い、銃を取り出す。

一瞬、恍惚な表情。

東子（銃に）「早く撃ちたいよね？……これでもいい？」

撃つ。格好よく。撃つ寸前に左手を斜め下に伸ばし、側の子供の視界を自然に塞ぐような  
姿勢。

撃ち終わった後、何かの発見の恍惚。

撃った後の銃を撫でる。射精した男性器を優しく労わる感じ。（でもはつきりそれをイメ

―ジさせる必要はなく、さりげなくで

子供は母親の側にいて、もう見ていない。母親は、銃に驚いた様子がない（基本、この隣の女性は表情が弱々しく死んでる）

男に土をかける作業が始まる。

東子「……やらせんな」

隣の女「……」

（母親が子供に手伝わせようとしたのを、東子が止めた）

それで二人で埋める。作業が終わる。

子供「……それ（銃）、貸してよ」

子供の表情は、無表情。怖さを感じるほどの。

東子「……駄目だ」

子供「なんで？」

一瞬、東子が考える表情。

東子「……なんでだろうね」

# 15

道で片方のハイヒールを見つける。一瞬迷うが、もう拾わない。

# 16

銃を磨いていると、チャイムが鳴る。

ドアを僅かに開けて見ると、スーツの男がいる。

刑事「警察なんですが」

男が警察手帳を開いて見せる。

女は顔には出さないが動揺する。

そしてさらに動揺する。刑事は写真で見た男。

主人公には意味がわからない。

刑事「その裏手で、死体が発見されてね」（もうタメ語になる刑事）

刑事「何か、知ってることがないか、聞いてるんだ」

刑事「……入っても？」

東子「少し、待ってください」（思わず敬語）

ドアを少しずつ開け、東子は外に出る。  
ドアにもたれる。塞ぐ感じ。

刑事「……死体の男は元暴力団の人間。このアパートのオーナーらしい」  
刑事「この女をこの辺りで見てないか。ヨシノという」

東子とは違うタイプで、40代の美しい女性。東子に嫉妬の感情がよぎる。

刑事「死体から弾が出た。珍しいタイプのやつだね。私達が探してるこの女の銃だ。この女は既に一人殺してる。音とか、聞いてないか」

（刑事は主人公を性的に見ている。思わずそうなってしまうている）

東子「知らないです」

刑事「そうか。……この女は銃を持つてる。捕まえないと危ない」

刑事が何気なく続ける。

刑事「銃も取り上げないと」

主人公はその言葉に微かに反応する。

東子「……どうしても？」

刑事「は？ ……決まってるだろ」

東子「……」

刑事「……また来る」

#17 【主人公の過去】（ここで一連全てを一度にやらず、小出しにした方がいいかも）

テーブルに離婚届けと錠剤。母親は病んでる感じで髪も乱れている。

母「他所に、女の人が……？」

父「関係ないだろ」（父の顔は見えない）

二歳くらいの弟の遺影。仏壇。

母「その人は妊娠してるのね」

父「してないよ」

母「待望の男の子」

父「……してないよ。そんなことじゃない」

母「……何見てんの」

母親、少女時代の東子を睨む。母親、後頭部を激しく短く搔く。

母「あんたがそんなだから、お父さんがこの家から出て行くんだって」

母が東子を見る目が虚ろになっていく。

母「お前が、代わりに」

父はうんざりしたまま、それに対して何も言わない。

東子は無表情。

## # 18 【主人公の過去】

少女（東子）はペットショップで鳥カゴを見ている。

知らない若い女が、少女をやや心配げに見ている。

女は隣に行く。明るく声をかける。

知らない女「可哀想だね。こんなカゴに入れられて。出たいんじゃないかな」

でも少女は反応しない。

少女「……このままがいい」

知らない女「ん？」

少女「こういう時があってもいい。……私の子」

## # A A

現在の東子が部屋で銃を磨いている。執拗に性的に。銃に指が絡みついている。

## # 19 【主人公の過去】

両親の元に、そのカゴの鳥を持って帰る少女。

母親が驚く。

母「いらぬあなたをどっちが引き受けるか決めてる時に」

母「お前は鳥を拾ってきたのか？」

母「渡しなさい」

母親が少女から鳥カゴを奪う。少女の自分の手から、鳥カゴが取られる。少女は無抵抗。その間、ただ無表情で立ち続ける。

母「こんなもの」

母親が、鳥カゴを壊そうとする。カゴが歪む。

父親は母親のヒステリーにうんざりし、背を向けて見ずに、テーブルの煙草と小銭入れを持ち、ドアを開けてどこかに行く（外に出る）。ドアが閉まる。

（少女を連れていくのではなく、煙草と小銭を持っていった風景。ドアの向こうに行ってしまう）

（全体イメージとしてドアを多発。ドアの向こうは大人の世界。父親の別の顔。彼氏の過去。銃の過去。内面を塞ぐもの。つまり、ドアを開けると、ろくなことがない）

母「こんなもの」

鳥カゴのエサ入れを開け、鳥をつかみ外に出そうとする。狂氣的。

つかめないが、鳥がその入口から出ていく。母が手で掻き出した格好。

（少女の子宮から子供が母に奪われたイメージ）

鳥がカゴから出た瞬間、母親の顔に笑みが浮かぶ。

（自分は長男を奪われた。だから他の子供もこうならなければならないというか、被害者（母）が加害者になる瞬間の人間の喜びが母親の顔に一瞬浮かぶということ）

その間、少女はずっと無抵抗で無表情で立ち続けている。小鳥を助けようと身体を時折動かすが、動かない。

#20 【主人公の過去】

施設に入っていく少女。

#21 【主人公の過去】

道にいる少女。

少女の目の前に変質者、

少女の美しさに、吸い寄せられたような表情。

唇を濡らせたり、少し舌が出たり、唾を飲み込んだりしている。

変質者「お嬢ちゃん、……お願いだ。お願いだから」

少女は美しい。少女は逃げる。逃げ切る。

変質者は、とても切実な表情で、少女に逃げられる。

(つまり、少女は子供として愛される前に、女であることで対象になる。世界(人々)は、少女を子供として守ることを怠ったまま、女として見る。守るべきものとして愛されるのではなく、女としてしか関心を持たれていない。辛い状況)

少女は迷子になる。公園に一人でいる。

公園はものすごく広い。ものすごく、ものすごく広い。遊具や木も、あまりにも大きい。少女は気絶する。

(小さい少女が、巨大な風景の中で、小さくぱさつと横に倒れる感じ)  
しばらく間があり、警官が通りかかる。

# B B

現在の東子が部屋で銃を磨いている。執拗に性的に。銃に指が絡みついている。

# 2 2 【主人公の過去】

高校の時に、父親と再会。喫茶店。

一瞬、父親が自分を女として見たのに気づく。(実際に父親にやられたりはしない)

# 2 3

どこかから帰ってくる東子(大人・現在)。

部屋に戻ると、母親がいる。母親が勝手に入っていた。

母親は部屋のガラクタに驚いている。

母「なんなの？ ねえ、なんなのこれは！」

東子は、母親から目を逸らし、離れていく感じ。

東子（半分独り言）「……ほっとくところなるんだよ。……人間は」  
母「……あなた」

東子「？」

母「……これは何？」

母親の手に拳銃。

驚いた主人公は母親から銃を奪う。

母「お前は、……お前は本当に何の役にも立たない」

母「何の期待にも応えられない。生きていても本当に意味がない」

東子が、気づいたように、ゆっくり母親に銃を向ける。

母「前に教えたでしょう！ 早く結婚しなさい。お母さんが生きてるうちに。早く」

母親が、自分の後頭部を短く、激しく搔く。

（母親は、人の話を聞かないタイプ。だから、目の前で娘が銃を自分に向けているのを見ているのに、自分が話すことばかりで、そのことを認識していない）

母「何でお前が生きて純也が死んだんだ。普通逆だろう？」

東子、銃を構えたまま、母親を撃ちそうになる。

母「そんなんだから男の人に嫌われるんだ。尽くせと言っただろ？ 女は出しやばるな。前  
に出るな。教えただろう？」

母「生んだのがお前だったせいで私の人生は滅茶苦茶になった」

母「いやらしい。身体ばかりいやらしい」

母「見ると苛々するんだよお前は。何でお前はそうなんだ。お前のせいで私は不幸になっ  
た。お前のせいで私は不幸になった」

東子は怒りと嫌悪でもう撃つ寸前にまでなる。凄い汗。  
でもやめる。そして部屋を出ていく。

（母のここでのセリフ、要再考。もっといける。少し時間をください）

## # 2 4

外を歩く。誰かが後をつけてくる。舌打ちする。

主人公は母親のことでかなり機嫌が悪い。

自分の後頭部を激しく搔く。母親と同じように。

振り向く。銃で殺してやろうかと発作を覚える。

後をつけてきた男Bは笑みを浮かべる。

（冒頭から、後をつけてきていたのはずっとこの男B。主人公のストーリーカー）

男B「見、見た」

東「……？」

男B「お前、死体、撃った」

茫然と立つ東子の横を、男Bが通り過ぎていく。

#25

今度は男Aが東子の後をつけている。東子は気づいていない。

東子は街で、また金を持ってそうな男を物色し、声をかける。

東子「6万」(値上がりしている。銃に影響され値上がりした)

驚いた顔をされる。舌打ちする。

東子「4万……4万5千」

男は東子を眺め、同意してホテルに向かう。

男A、やや慌てる。

(男Aは東子を性的に見、そんな自分に微かに苛立っている様子をややしている)。

東子はまたホテルに入らず路上で金を受け取り、去る。

でも男は諦めない。人混みがない。まあまあやばいかも、という時、見かねた男Aが来て男の肩をつかむ。男は驚き、去る。

男A「……お前、何してんだ」

東子「……」不満そう。

その時、東子は遠くに、死んだ女が殺すつもりだった、そして自分の部屋に来た刑事の男と、写真の女が歩いてるのを見る。

男A「……どうした、……ん？」

東子は刑事と女をつけ始める。男Aは戸惑うが、ついていく。

刑事のマンションを見つける。男Aは、主人公より隠れ気味。

男A「あいつに見られるわけにいかないんだ」

東子「……？」

マンションのエントランスのドアを開けた時、酔っ払った二人の、責任の欠如のようなやらしい仲の良さに、東子は殺意を覚える。

ドアは開いたまま。中の入口のオートロックは壊れてる。



女「壊れてんじゃない。ボロっ」

刑事「うるせえ」笑う。

刑事の部屋は一階。部屋に入っていく。ドアが閉まる。

東子「……知り合いなの？」

男A「……」

#26

女、銃を磨いている。性的に。恍惚としている。

鳥カゴにはエサと水がなくなっている。鳥が衰弱している。女は気づいていない。

#27 (パターン1)

男Bに後をつけられ、そのまま声をかけられる。

東子は観念した感じ。

ついてこいと言われ、物陰に行かされる。ポケットの中で密かに銃を握る。

初めは緊張感が凄い。最初の殺人と思われる。

男Bは物陰に來ると、勝ち誇ったように女を見る。

そして堂々と男Bは屈み、四つん這いになる。

男B「……言うことを聞け。……ほら」

女は微かに驚く。全体的に、この主人公の表情はあまり変わらない。

男B「何やってんだ、……蹴ろ、ほら」

女が軽く蹴る。男が怒鳴る。

男B「言わせるのか？ 言わせるんだな？」

男B「もつとだ」

女が強く蹴る。

男B「あー」と叫ぶ。

女が強く蹴る。何度も。

男B「ああ、この世の喜び」

男B「この世の喜び！ この世の喜びいー」

男B「富士山が見える！ 富士山……富士山……！」

男は恍惚として倒れ込む。

男B「今五合目か……六合目……天候は……」

そして起き上がり、やや勝ち誇ったように主人公を見る。

男B「また来る。……次は、こんなもんじゃない。すごいぞ」

東子「……」

男B「お前は目の前に神を見ることになる」

男が去る。女は顔を歪める。そんなに表情は動かさないが、心底軽蔑した嫌そうな様子の表情。

## #27 (ペターン2)

男Bに後をつけられ、声をかけられる。物陰に来いと言われる。

物陰に入った瞬間、東子が男Bに銃を向ける。

男B「まじかよ、お前」

男B「いかれてる……」

そのまま男Bは去る。

(ここで、別のものを入れる案も。最後のページを参照)

## #28

東子の部屋に、東子の拳銃で自殺した母親の死体。

帰宅した東子は取り乱す。普段はクールだが、ここは激しい。

東子「まじかよ」

東子「勝手に使うなよ」

銃を拾い、必死で拭く。銃の穢れを拭うように拭く。

東子「ふざけんなよ」

母親の死体を蹴る。

(母親の死より、銃が使われて汚されたことが大きい)

でも少し落ち着いて、茫然とする。銃を見つめる。

東子（銃に）「あなたがやったの？（やってくれたの？ の意味）」

東子は恍惚な、でも虚ろな表情。

東子（銃に）「あなたに、お返しを……」

銃を持ったままフラフラ部屋を出て行く。

鍵をかけていない。

東子「それに、……あなたを、……取られるわけには……」

歩きながら銃を出し口にもっていき、ぼんやりした表情で性的に一回だけ舐める。

写真を取り出す。刑事と女の写真。

東子（独り言）「女はもういい」（母親はもう死んだから）

## #29

街で刑事に声をかける。

東子「……七万」

驚いた顔をされる。東子は後頭部を短く激しく搔く。

東子「五万……五万五千」

東子「こういう仕事してるの。でも客は選ぶ。あなたがいい」

聞いた刑事がやや笑みを浮かべる。

この展開を気に入ってる様子。女のこと性的に見ている。

刑事「五万だ」

主人公は承諾し、刑事の自宅に行く。

## #30

別の刑事A Bの二人が主人公の部屋のチャイムを押す。

（#27が、男BのM行為の和み系（パターン1）ではなく、パターン2の方にするなら、ここに男Bも同行。悔しくてチクった）

留守かと思ったら、鍵が開いている。緊張して入って驚く。

ものすごい量のガラクタに、母親の死体、小鳥の死体（餓死）。つまり、惨劇。

（主人公の今の内面の惨劇。今の、そしてこれまでの主人公の人生の惨劇。それが外の世界に可視化される）

刑事Bが何かにつづかって、古い何かが散らばる。高校生の頃の主人公の写真と、メモ。

メモには「何もしたくない何も望まないただそっとしておいて欲しいかまわないで欲しい全て面倒臭い」とある。その他にも、短い言葉のメモが複数あると良い。子供の頃に書いたと思われる不気味な絵とか。これで、観客側にも、東子の内面の惨劇が可視化される。

(小説に寄せるなら)。

テーブルに、主人公の日記もある。

「拳銃を拾う。なんで拾ったのかは、これが不機嫌そうだったから」

と書かれたものに消し線が引かれていて、

「昨日、私は拳銃を拾った。もしかしたら拾ってあげたのかもしれないけど、私にはよくわからない。こんなに奇麗で、不機嫌そうなものを、私は他に知らない。」とあるのが、少し見える、とか」

刑事A Bは、あの刑事に電話をかけながら、急いで女を探しに行く。

# 3 1

東子はその刑事と刑事の自宅マンションの中にいる。

刑事の携帯電話は鳴っているが、刑事は気づいていない。

(物語における、被害者と加害者の反転現象を出す感じ。危ないのは主人公ではなく、相手(刑事)。観客側は、むしろ主人公を止めたい。もしくは、観客側は、むしろ主人公にやらせたい。どっちに持っていくか。やらせたいなら、観客側も共犯となる感じで)

主人公は、大袈裟にはしないが、誘惑する感じ。

裸にはならないが、さりげないが、でももの凄く性的に。

(観てる観客の男性が、主人公としたくなるくらい性的に格好良く。観てる観客の女性が、自分もこういう仕草をちよつとしてみようかな、と思うような何か)

でも主人公は刑事を撃とうとしている。

刑事が主人公に近づき、まずキスしようとする。

キスを避ける。気づかれないように主人公は相手を撃とうとする。緊張感。

刑事が笑みを浮かべ背を向け、引き出しを開ける。コンドームを取り出す。

刑事「あの事件のことだが」

(突然言われる。男が背を向けながら、日常的な感じで。新品のコンドームの箱のビニールを開けながら)

刑事「奇妙なところがあってな。……銃の所有者、……あの男を殺したはずのヨシノって

女は、死体を埋めないはずなんだ。……そういう女なんだ」

(刑事が前に見せたヨシノの写真がここにあるといい。写真があった方がわかりやすい。)  
「ほら、俺が探してるこいつだが」みたいに、もう一度見せてもいい」

刑事「死体の男はあのアパートのオーナーだったろ？ 女癖が悪いと聞いている。隣にいるな、(頑固そうな女が。)あの後、ようやく話せた(まだ日常風に言っている)」

刑事「知らぬ存ぜぬだったが、……ああいう顔、苛つくんだよ、……滅茶苦茶にしたくなる。

見た瞬間、何かあるな、と思つてね、でもあの男はヨシノのあの銃で撃たれてる。

だから違うし、混乱した。まあ、どのみちあの隣の女は、銃で撃つような真似はできない。そんな度胸はない……でも」

半分だけ刑事は振り返り、女を見る。

刑事「お前でも無理だ」

また顔を戻す(女からすると後頭部)。

刑事「お前は人間を撃てない。外見は何やら装つてるが、内面は弱く、度胸もない女だからだ。だが」

刑事は背を向け続けている。

(全体的に、少しずつ、さりげなく、嫌な予感がし、追いつめられていく感じ)

刑事「別のものなら撃てるんじゃないか？」

東子「……」

刑事「死体とか」

刑事「あの銃を持つた女、ヨシノはもうどこかで既に死んでるんじゃないか？……お前は

刑事の視線をわかっていない。お前はあの時、俺を部屋に入れなかった。でも一瞬、

お前の部屋の中はこの視界に入ってる。……ゴミ屋敷。あの時は変な女だと思つた程

度だったけど、隣の女を見て、そして今なら何だか辻褃が合う」

後ろ姿で座ってる男の手には、コンドームと手錠。

刑事「色々拾ってくるんだらうお前は。……俺の何かを知ったか？ つまらんものを拾つた

んじゃないか？」

襲われる。抵抗する。刑事は東子に馬乗りになり、まず手錠を左の手首にかけた。男は自分のシャツを脱ぎ、自分のズボンのベルトに手をかける。

男はむかっている。なぜむかっているのかは、女が美しく、性的に刺激され、そして女が愚かに見えるからその愚かさ加減にも切れている。

(実際にどうこうではなく、刑事には彼女がそう見える、ということ)

むかっているから、コンドームを脇に捨てる。

刑事「あー？ むかつくな、ほら、ああ、中に出してやる。なあ。ヨシノにしたみたいに」

刑事「あー？ ほら」

東子が振り解き、銃を構える。

「撃つか？ ほら！ おー？ 無理だろ？」

(刑事は刑事で、女を虐げてしまう病理を、否応なく持つてしまっている感じ。嫌がる女に興奮してしまう。男Aの場合も主人公を性的に見てしまうことに、少し苛立っている。(「テーマの一つは女性の解放、つまり男尊女卑社会の破壊、ですが、」そういう男側の性の動物的苦痛(?)もあつた方が、物語はリアルになるというか。単純な悪や、社会規範だけではない領域に近づくことができるというか)

刑事が狂氣的に笑みを浮かべ、再び女に近づいていく。

刑事「ドアを開けるとろくなことがない」

刑事「馬鹿だお前は。人のすることが、欲しくなった。……まあ当然、他にも何かあるんだろうが」

刑事「でも無理だよ、お前には無理だ。お前には何もできない」

主人公は構え続ける。

刑事「お前達だ。お前達だよ。お前達は何もできないんだよ、ほら、その銃を渡せ」

主人公が構えながら泣く。

東子「嫌だ」

刑事「渡せ」

東子「……嫌だ」

主人公は構えながらずっと泣いている。

刑事「あー、面倒くせえな。泣くな。うつとうしい。ん(尿意)? ……トイレいくわ」  
女をナメきっている男が背を向け、トイレのドアを開けようとした瞬間、女は気が遠くなる。ぼんやりとし、撃とうとする。

銃声が響いて、刑事が驚いた表情で倒れる。

ものすごい血の量。横に男Aがいる。男Aが撃った。男Aは息を切らしている。

男A「鍵くらいかけとけよ」

(マンションのオートロックは壊れている。男の部屋のドアも鍵がかけられていなかったことを、ものすごくさりげなく前出させておく。つまり、閉じられていた色々なドアが、物語が進むにつれ緩く、崩壊していたこと。全然関係ないシーンで、前半のどこかで閉まっているドアが並んでいるシーンと、後半で、並んだドアが無造作に幾つか開いているシーンを何かのシーンで何気なく出せないかどうか)

男A(東子に)「……やめとけ」

男A「綺麗な指だ。……そんなもん持つな」

刑事(瀕死)「……え? ……そんな! 汚いですよ、ああ、そうか」

男Aが、倒れている刑事をもう一度撃つ。刑事死ぬ。(刑事の方が年上。でも敬語だった)

男A「こいつとは、色々あった。でも」

男Aが今の主人公の格好にやや性的な目。

男A「お前は何も知らなくていい」

男A「こういうクソみたいなことは」

男A「俺らみたいな馬鹿がやることだ」

#32

男Aと主人公が歩く。昼間の繁華街。人が多い。お洒落なオープンカフェ。

男Aが勝手に注文し、女は放心したまま食べない。

男A「まずその手錠、なんとかしないとな(笑う)」

何かの布を巻いて隠している。

——画面に、スタッフの名前、出始める。(?)

男A「まあ、俺も色々あったし、お前もそうだろうけど」

一瞬、男Aが照れたようににかむ。

男A「ついてくるか？ 俺といると、疲れるだろうけど」

クールな男性が可愛いことを言う、ギャップ感。

主人公はずっと放心している。

男A「食べるよ、……人気あるみたいだぞそれ、……まあ食べてろ。とにかく」

男Aが席を立つ。

刑事達が来る。遠くで男Aと東子を見つける。

男A「俺がお前を守る。お前は何もしなくていい」

会計の伝票を、右のセリフを言いながら、当然のように、持って背を向ける。

その瞬間、主人公の腕がスッと上がり、男Aを撃つ。

——エンドロール同時に消える。(??)

(主人公は放心状態のまま、精神だけは、あの刑事の部屋にいる時のままだったということ。それが遅れて発動したということ)

(極端に言えば、会計払おうとしたら撃たれた男)

(そして、男が女を守るというストーリーにある流れ、女が撃たなくてよかったという観客側の安心、恋愛、つまり、物語そのものを撃った感じ。物語が、物語の内側から銃によって破壊される物語にしたい)

(ちなみに、男が伝票を取っていった手の動きは、父親が煙草を持っていった時の動きと全く同じに。裏の裏というか、無意識による歪みの一致現象とでもいうもので、ここは奥過ぎで表面では説明不要)

撃った後、女は自分の行動に驚くが、しかし、何かを悟ったように笑みを浮かべる。ものごとくスッキリした顔になっていく。

男は倒れ、血まみれで動かない。周囲の客達が悲鳴を上げ、騒然となる。

近づいていた遠くの刑事A「ふざけるな」

刑事A「あの男は、ヨシノ殺害の犯人だぞ」

群衆を掻き分ける。

刑事B「あの女知ってたのか？」

刑事A「知らねえだろ。何だあいつ」

刑事B「あの女、勝手な真似し……」

(やっと思つつけた男Aを、主人公ごと逮捕したかった)

返り血を浴びている東子は立ち上がる。この時の東子はものすごく美しい。とても、とても美しい。活き活きとしている。女の左手には手錠がぶら下がっている。騒然と自分を見る大人しそうな連中に銃を向ける。怯える客達。東子が笑う、東子が歩き出す。

東子が遠くの刑事達に気づく(警官も連れてくる)。

東子(銃に)「楽しかった。……あなたは？」

東子が銃にキスする。

東子(銃に)「まだ生きていたいから、……ごめんね」

近くのテーブルに銃を置こうとした瞬間、見知らぬ小さい男の子供の存在に気づく。相手は死んだ弟のようにも見える。

東子は怯えたような表情のすぐ後、茫然と、銃を子供に向ける。

恍惚としていく。

刑事A「まずい、撃てるか」

警官「無理です。人が多い。遠過ぎます」

騒ぎが大きくて刑事達の声は聞こえない。

東子が恍惚としていく。

恍惚としていく。

恍惚としていく。

引き金の指が震える。

銃を落とす。

東子は、さっきまで自分が子供に銃口を向けていたことに、驚く。

刑事達が来て、捕まる。

引かれて行く時、落ちた銃を見つめる。銃という存在自体に怯えたような、底知れぬ得体の知れないものを見るような、でも別れが悲しいような表情。



東子(銃に)「……ごめんね」(このごめんねは、最初のごめんねとは、トーンが違う)

画面が暗転、暗転の中で、騒がしい喧騒と、被害者はまた息がある、というようなセリフが少し聞こえる。

(男Aがヨシノを殺したことを、主人公は知らない)

# 33

刑務所の面会室。

相手は弁護士と、それに連れられた隣の部屋の女の、子供(男)。

弁護士「この子の母親の正当防衛が、なかなか認められず、……裁判は難しい状況です」

でも主人公はその話には興味がない。隣の子供に目を向ける。

弁護士「ですから、この子は今施設に」

東子が子供をしばらく見つめる。

東子「色々見ちゃったね」

(子供は、母とアパートの所有者のセックスと、母が男を殺害したところを見せられている。貧しくもある)

(主人公の声質は、そんなに親しげでなく、やや感情がこもる程度。母ではなく、姉の感じ)

東子「あなたは多分、……思春期になったら一度歪むと思う」

東子「大人になっても、結構厄介な人生を進むと思う」

東子「……でも乗り越えた時、……多分強いよ」

子供、無表情のまま泣く。

しばらく沈黙。

子供「出てきたら、……これ、あげるよ」

子供の手に、銃のキーホルダー。

東子「ありがとう。……でも」

言いながら、懐かしげに、切なげに、そのキーホルダーを見る。一つの恋愛の終わり。

東子「……大丈夫。(私も色々、考えてみるから)」\*カッコのセリフ追加。

弁護士と子供が去る。

刑務官女「もう一人、面会人来てるぞ」

刑務官女「そんな面倒な顔するなよ、……相手も死んでないし、そんな長い刑期にならない

みたいだし、大人しくしてれば早く出れるんだから」

刑務官女「あんたモテそうだし、……面会人も男だよ。羨ましいくらいだ」

東子は誰が来るかわからず、面倒だったが、でもちよっと期待してる感じもする。

面会室に、脅えた男Bが来る。東子と見つめ合う。

表情の動きは僅かだが、東子がもの凄く不快で嫌な様子の顔をする。

その瞬間、画面が暗転。黒い画面になってから、すぐ東子の舌打ちが鳴って映画が終わる。本当のエンドロール。

(もしラストを和んで終わらないなら、男BのMのコシカルなシーンもカットなら、子供が見せた銃のキーホルダーを切なげに見て、ありがとうと言って暗転。暗闇で「でも大丈夫」と言っただけなら、かな……)

エンドロールは、音楽か、もしくは、「銃」(男版)に倣って、エンドロールの中、声だけ、主人公がすぐ男Bとの面会を取り消して、雑居房に戻って他の囚人との会話が時々聞こえるとか。快活にしゃべってるわけではないが、ほんの少し、口数が多くなった印象とか。主人公の日常会話を、観客はここで初めて聞くというか。明るい会話ではなく、普通の会話。もしくは、刑務所の中の雑踏がただ流れ続けるとか。

(これは恋愛映画かもしれない)

★男Bとのやり取り(#27)の次に、別の何かのシーンを入れて、さらにその次、母親の死体を見る場面(#28)の前に、変質者から逃げていく少女(東子)のシーンを入れて、走る時の息が切れるハアハアという音が聞こえて、モノローグは使わないと書いたけど、ここだけ「何もしたくない何も望まないだそっとしておいて欲しいかまわないで欲しい全て面倒臭い」と重ねて入れて、その息が切れる音は少女が気絶するところでもずっと聞こえていて、その音のまま、母親の死体の画面になって、それを見て驚いている東子の息の音になっただけみたいな風にするかどうか。

(了)

\*

【左記は、脚本の追加分です】

東子が帰り、和成が店内に戻ると、隅の席で、小声で若い男性客が連れの年上の女性に言い寄っている。(この二人は一緒にこの店に来てる)

触ろうとするのを、女性が弱々しく抵抗している。

女はMっぽい。

和成は無表情で、自然に近づいていく。

男が無理にさわろうとし、女の腕をひつかいてしまう。  
その瞬間、和成が男の椅子を倒す。

テーブルの上のアイスピックとおしぼりを掴み、倒れた男の頭の後ろにしゃがみ、おしぼりを口に入れて押さえる。

和成「目だとグロいからな」

和成「右の鼓膜」

男は恐怖する。

和成「結構痛いぞ」

手を離すと、男が逃げていく。

この間、店内の客は皆、驚きもせず、普通にそれぞれ飲んでいる。

和成が女に近づく。女はMっぽいだけじゃなく、大人しそうなのに、(性的に)妖しい(無自覚)。興味を持ってしまう自分に、和成はイラつく。

和成「大丈夫か」

女「……」

和成「血イ出てるな。こっちに」

優しく女を事務室に連れて行く。

和成、慣れない手つきで、箱から消毒液を出す。

和成「どうすればいいかな。こう……かな」

女は、和成の様子に、子供を見るような微笑ましさを感じる。

もう、少し、頼りにしてるだけでなく、男を少し恋愛的に見ている感じ。

おしぼりに消毒液をたらし、傷口に当てる。

傷が染みため、女が小さく声を出す。でも和成はやめない。

和成「大丈夫。すぐよくなる」

様子がおかしいことに、女はようやく気づく。

でも女の声が、少しだけ喘ぎを帯びる。少しだけ。

和成「大丈夫。我慢できる」

そうやって、試しにとという風に、女を抱きよせる。

優しく首筋にキスをする。

女は少し抵抗の素振りを見せるが、受け入れる。

それを感じた瞬間、和成はつまらなそうな表情をする。

そのまま立ち上がり、女を窓際で後ろ向きにさせ、スカートをたくし上げる。

急に後ろ向きに、つまりぞんざいにされたことに、女は戸惑うが、そのまま。

窓の先に、歩いていく東子。和成は無表情で、東子を見ながらズボンのベルトに手をかける。(男女とも脱ぎはなし)

【こちらも、追加シーンです。東子が騙してお金だけを取る二人目の男のセリフで、監督の武さんが「歯医者舐めんよ」という最高のセリフを加えたので、さらにそれを僕が膨らませて、「蹴っていいぞ」とか「お前の前歯C1だぞ」みたいなシーンと、東子の歯磨きシーンを追加しました。そのことをさらに踏まえて、富田も歯医者ってことにして、左記のシーン（と、ラストの歯磨きセット）を追加しました（武さんの感覚では、彼は実は弁護士らしいです）。】

歩く東子の前に、道を塞ぐように富田が立っている。

富田「私は神だ」

（母の自殺で）茫然としたまま、無視して通り過ぎる東子。

富田が追いかけて、横を歩く。

富田「実は、俺も歯医者なんだけど」

その言葉に、東子は一瞬やや驚き、不快な顔をする。

富田「確かに、お前の前歯はC1だ。でも左の奥歯はC2だ」

その瞬間、東子が富田の臀部を蹴る。富田が転げる。

富田「あー、もう……、感謝しかない……」

東子は歩いていく。富田は倒れながら。

（もし入れるなら、左記）

富田「……でも、僕の股間は、C3……」

富田「世界の皆様、お疲れ様です……」

\*

【左記のこれは、そもそもの背後の事件の概要です。映画で描くかどうかはおいておいて、元々はどんな事件だったのか、を決めておこうとなつて、急遽作成したものです。】

和成の怪しい店で麻薬を売ってる男を和成が刑事に知らせ、刑事が逮捕して、麻薬の一部をかすめ取って、ヤクザに売る、その分け前を和成にも渡す、ということをしていた。

ヨシノはそのヤクザの女。和成はその「小遣い稼ぎ」は何となくしていた。刑事との腐れ縁で。

ヤクザは金に困って、刑事に自分の女のヨシノを一晩売る。ヨシノは襲われる形。刑事の女も、それを笑って見ていたかもしれない。全部知って、ヨシノは自分の男（ヤクザ）を殺して、刑事も殺すつもりで、その後は全部通報するから覚悟しとけと和成に言う。和成は止

めようとして、思わず殺してしまう。和成にとっては、初めての殺人ではない。ヨシノが死んだことを、刑事は知らない。

刑事との腐れ縁を和成は前からうざく感じていて、どうせならヨシノが殺せばよかったとも思っていた。

東子が現れて、最初、あの銃を持つてるなら代わりにこいつがやればいいのに、と頭の片隅に（半ば冗談で）あったが、妙に東子が「復讐」に興味を持つから、引きながらも、事務所ですれ教えたりした。刑事に執着する東子の意味がわからず、このまま野放しにするか、とも思うが、でも惹かれてしまって、迷ってる時に、最後は自分で（騎士道精神を發揮してしまい）刑事を殺した。

\*

【左記は、脚本の註釈になります。映画の深層を共有するために、制作サイドに渡したものです。これも同じく、短く伝えるためにやや露骨な表現を使っていたので、ほんの少しだけ修正しています。一部、脚本内にある註釈と重なっている部分があります。これも、後のやり取りを所々加筆しています。】

#### 『銃』脚本注釈

小説の「銃」（女版）を仮に書くとしたら、もう少し落ち着いた純文学短編になると思われるけど、これは映画なので。あくまで映画「銃」（男版）の、映画「銃」（女版）。

# 1

水が出続ける。傍らに銃。一応、どことなく、出産のイメージ。

# 3

不満そうだったから拾う。女の部屋のものには全て、不満そう、不機嫌そうに見えた、というキーワードがある。

# 5

元ヤクザで、謎の雰囲気があって、結構な存在感。よくいる「エロくて悪いチンピラ」ではない。来るのはこれが初めてではない。アパートは訳ありな感じが満載の建物。

（参考として、宮崎勤。彼は自分の部屋をビデオテープで囲う。ビデオテープは隙間なく録画されている。なぜ間を空けず録画したのかと捜査員に聞かれた時、彼は外の世界が入ってこないようにするためと答えている。これが、この主人公の部屋の意味）

立ち退きは部屋の崩壊で、彼女にとっては人生の終わりと思うほど重要。その一カ月の間、何をするか考える。(でも途中から変わる)

#9

女は、この銃が本来何を撃つつもりで、それは誰だったのかが知りたくなる。

### 「銃」(男版)の深層のテーマについて。

拳銃の物語にフラフラしている人間が取り込まれていくように見せかけて、その奥には無意識の幼児体験があるということ。

拳銃に魅せられて撃つたというより、拳銃による一般的なイメージ(人を撃つもの)によって、それを達成しなければならぬように感じているという「表層」現象による行為でもある。でもそれが主人公の過去の清算になっているということ。(銃と無意識の二重構造。または一致)

原風景は、自分を置いて去っていった母親の後ろ姿のイメージ。それを止めようとして、撃とうとした。殺そうとしたのかもしれない。

要するに、主人公の過去の清算の物語が、現象としては、ああいうストーリーで進む。猫を撃つまでは無意識の流れはまだ微弱。でも父親との病院での再会を経て、無意識の清算願望がうごめく。銃によって(助けを借りて)無意識の過去の清算願望が刺激され(父親との再会もあり)、意識では乗り越えたが(隣の女は撃たない)、無意識によって(電車で)叶えさせられた人間の悲劇。でも演じた村上君はそこで笑った。主人公は無自覚ではあるけど、主人公の過去の清算願望が達成されたから。恐らく演じた村上君はそれを本能で感じ取ったのでは。原作での主人公の笑いは自分を怯えながら見る乗客達に対抗するためのものだったけど、映画では願望充足が含まれる笑いになった(あの笑いは、刑事が来たことによっても成立。やってしまったよ、みたいな感覚も)。それが映画としては大変良かった。

物語で撃とうとし、意識で止めたのは女(母親)。無意識で撃ってしまったのは男(父親)。

それを踏まえ、「銃」(女版)の深層のテーマはどうなるかについて。

単純な対称性では味気ないので、もう少し複雑にする。女性であるから自動的に複雑にな

るかもしれない。

(でもその複雑性や深層の幼児体験テーマをそのまま映画で前面に出す必要はなく、あくまで根底にあるものを決めておくということ。「銃」の映画(男版)では、この根底にあるものがしっかりとっていたので、深みがあった。つまり、全てをはっきり見せる必要はない)

#### 【東子の過去】

純也は主人公が6歳の時に病で死んだ弟の名前。長男を亡くした母がおかしくなり、父親もしんどくなり、父の方は恐らく他所に女をつくった。離婚。二人とも、少女だった主人公をいらない。特に母親は、死んだ長男のことばかり考え、なぜか弟が死んだのは少女のせいと思ってるんじゃないかというくらい、少女を憎んでいる。母親は「男の子が欲しかった」という旧時代性を未だに固く維持し続けている、悲しいくらい維持し続けてしまう女性。旧時代の価値観の異常なまでの塊。マザコンの息子を支配し共依存するタイプ。主人公は高校まで施設で過ごしている。

小鳥を連れてきたのは少女の当てつけであるけど、少女の無意識では、少女は自分が捨てられると感じたので、自ら疑似家族を作ろうとした。小鳥は子供。自分が親。

父親は母親のヒステリーにうんざりし、背を向けて見ずに、テーブルの煙草か何かを持って、ドアを開けてどこかに行く(外に出る)。ドアが閉まる。(少女を連れていくのではなく、煙草か何かを持っていった風景)

(少女は子供として愛される前に、女であることで対象になる。世界(人々)は、少女を子供として守ることを怠ったまま、女として見る。守るべきものとして愛されるのではなく、女としてしか関心を持たれていない。辛い状況)

「銃」(男版)の根底にあったのは、自分を置いて去っていく母親を止めたかったという主人公の原風景の無意識の願望が、銃によって叶えられようとし、意識の力でそれを止め、乗り越えたと思ったら、無意識の領域において、もう一つの願望、父殺しが叶ってしまうという物語。

「銃」(女版)の原風景は、自分の子供(小鳥)が母親によって奪われたこと、それを守りたかったこと。父親にそれを止めて欲しかったこと。あの時背を向けドアを閉めて出て行った父親(責任の放棄/父の不在の創生・お膳立て/ドアの向こうは「大人の世界」)を止めて罰したかったことになる(しかしこれにはまだ続きがある)。あの時守ってくれなかった「男」は、「男達」は、後に自分を性的にだけ求める。

父親を撃とうとする願望と、もう一つの無意識の願望は、母殺しになる。

不満そうなものを拾ってきて守る。守るもので自分の内面も守る。でもそこに、銃が来た。

この文脈で見る「銃」(男版)での、主人公と銃の関係性は、父(銃)と子(主人公)のようでもあるし、女(銃)と男(主人公)のようでもあるし、(文化(銃)と人間(主人公)、のようでもあるし)原作を読み直して気づいたけど、男(銃)と女(主人公)にも見える若干の「反転」がある。銃が持つ男性性が強いので恐らくそうだった。(もちろん、銃と主人公の関係性はもっと多義的で、これだけではない)

「銃」(女版)では、その文脈で言えば、銃(父、恋人、息子)と主人公(女・母性愛)となる。銃に守ってもらいたい、銃を守りたい、銃と性的な関係にもあり、銃の前の所有者のことが気になるし、銃のしたいことを私がやってあげる、みたいにもなる。そしてそんな「銃」は、圧倒的な攻撃性を有しているということ。それにも当然引つ張られる。

しかし、母親の短く頭を激しく搔く癖、は、最後の方で、主人公も同じことをする。

そこが超越され、女(銃)⇨女(主人公)になれないか。銃と主人公が、格好良く、攻撃的な女として結実、というか。(女性の解放というか。)

ドアの向こうは大人の世界であり、よく知らない父の世界であり、彼氏の前の生活でもあり、つまり、知らない方がいいことの象徴。「ドアを開けるとろくなことがない」

どこかのトイレで、＼あけるまえに、ノックしましょう、とか、＼ノックしましょう＼みたいな手書き張り紙が、ちらっとさりげなく映るとか。冒頭のトイレか。

プラス、主人公が小さい頃、何かのアニメか映画で、復讐する女に格好良き(憧れ)を感じていた、みたいなことを、さりげなく、ほんのちよつとだけ入れるかどうか。つまり、少女っぽい、少女ならではの夢。別に大袈裟にする必要はなく、少女時代の主人公が、何かのシーンの中で、そういう映画を観るところを2秒とかくらいでさりげなく入れるとか。

## #12

この死んだ女(ヨシノ)は、自分に酷いことをした人間達への復讐をしようとしていた。死んだ女は、目的の「途中で」死んでいる。誰かはこの銃で既に殺している。元ヤクザの女。何かの犯罪を組んでした。その内輪もめ。

銃に入っていた弾は四つ。死んだ女は一人既に殺し、残りは刑事とその愛人と、男Aで、全部終わったら自殺するつもりだったが、男Aに殺されたということ。でも主人公はそのこと、を知らない。男Aは、死んだ女を殺したことに、ちよつと罪悪感を抱いていた。



写真を見る場面は、当然、主人公が自分の父親と恐らくいたその愛人に彼らを投影しているわけではあるけど、それ以外に、主人公の根底に、「人のものが欲しくなる」という感覚が隠れている。友人の彼氏／彼女が欲しくなる、誰かの夫／妻を欲しくなるという感覚。つまり、死んだ女のやること、(やろうとしていたこと)が、欲しくなっている。それに、過去の清算願望がリンクしてる。

#16

相手が女だから刑事は職務中だけダメ語。つまり刑事はそういうタイプ。  
刑事は捜査という意味だけでなく、どうやらヨシノを個人的にも探している様子。

#23

観客側はみんなこんな母親を撃ちたいと思う。でも主人公はやめる。

#28

主人公の過去の清算願望を、銃が勝手にやってくれたイメージ。

#32

\*要するに、私が(刑事を)撃つつもりだったのに、何でお前が撃つたんだ、ということ。私のやるべきだったことを取るなということ。観客側の感じた恋愛モードが誤解だったこと。主人公は放心状態のまま、精神だけは、あの刑事の部屋にいる時のままだったということ。それが遅れて発動したということ。

\*主人公は、幼少期、母親が自分の小鳥を取り出すのを無表情で立っただけ見ていた。父に助けて欲しかった。でも本当にそうだったのかということ。父ではなく、自分が母親に噛みつけばよかったのではないかということ。あんな父には、本当は、守って欲しくもなかったのだということ。

\*ちなみに男Aは、女を守るのは男の仕事だと考えている。女を労わり、会計を払うのも、男として当然と思っている。女は面倒なことはいしなくていいし、考えたり何かをやったりするのは男だともどこかで思っている。女は男についてくるのも思っている。男の子がよかったと思われる社会。そういう感じを全部、主人公は同時に撃つことにもなる。そういう、未だ根強い世間一般の男社会風潮空気そのものを、同時に撃つことにもなる。

\*極端に言えば、会計払おうとしたら撃たれた男。

\*そして、男が女を守るというストーリーにある流れ、女が撃たなくてよかったという観客

側の安心、恋愛、つまり、物語そのものを撃った感じ。物語が、物語の内側から銃によつて破壊される物語にしたい。このあたり、もっと肉付けが必要。

\*主人公の過去の清算の無意識の達成願望なら、銃を奪おうとした刑事から男Aは守ってくれたことになり、父的なものでも、彼氏的なものでも、守ってくれたという達成ではあるのだが、結果的には、主人公が自分のその無意識の達成願望を拒否したことになる。しかし、銃は広い無意識の領域にあるものなので、無意識を、さらに奥の無意識が拒否した、とも言える。

\*男が伝票を取っていった手の動きは、父親が煙草を持っていった時の動きと全く同じに。裏の裏というか、無意識による歪みの一致現象とでもいうもので、ここは奥過ぎて表面では説明不要。(＊和成は色んな意味で上手くいく女性とばかり接していたので、言うことをきかない東子のような存在を無意識で望んでいた可能性があり、さらに、撃たれることも無意識で望んでいた可能性もある。)

\*「銃」の男版を見ている人に予想をつかせないために、刑事が死んだところを凄い感じにして、「あの映画『銃』(男版)に対応する電車の惨劇場面はもう終わってる」的な空気を出すかどうか。この外の場面はもう、主人公が男Aを撃つ寸前まで、映画が終わりそうなあの雰囲気満載にしておくかどうか。左側にはもうエンドロールが始めていて——映画の実際のシーンの画面の上に、文字が出て来る感じ——、主人公が男Aを撃った瞬間、エンドロールと微かな音楽が消え、雰囲気が一変してつまりまた物語が続くのはどうか。やり過ぎかな。でもそれくらいなんか仕掛けのなものがいるかな。

銃との別れは、男性と別れたイメージも含まれる。一つの恋愛の終わりでもある。つまりこれは、恋愛映画かもしれない。

映画「銃」(男版) のあの音楽、映画中のどこかでまた使いたい。

\*

【左記は、映画がひとまず完成した後、冒頭に言葉(エピグラフのような)が欲しい、となつて、考えた言葉です。】

ドアがあるなら、開けてもいい。

でもどこまで開けるのかは、少し考えた方がいい。

【以上になります。ありがとうございました。 二〇二二年 四月七日 中村文則】